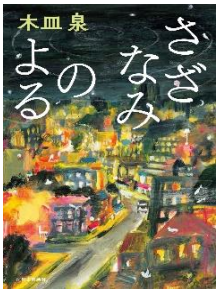
2019本屋大賞

1位		『そして、バトンは渡された』 瀬尾まいこ（著） 文藝春秋 キノベス!2019 第1位 血の繋がらない親の間をリレーされ、四回も名字が変わった森宮優子、十七歳。だが、彼女はいつも愛されていた。身近な人が愛おしくなる、著者会心の感動作。
2位		『ひと』 小野寺史宜（著） 祥伝社 たった一人になった。 でも、ひとりきりじゃなかった。 両親を亡くし、大学をやめた20歳の秋。 見えなくなった未来に光が射（さ）したのは、 コロッケを1個、譲（ゆず）った時だった――――。 激しく胸を打つ、青さ弾（はじ）ける傑作青春小説！
3位		『ベルリンは晴れているか』 深緑野分（著） 筑摩書房 第160回直木賞候補作 総統の自死、戦勝国による侵略、敗戦。何もかもが傷ついた街で少女と泥棒は何を見るのか。1945年7月。ナチス・ドイツが戦争に敗れ米ソ英仏の4カ国統治下におかれたベルリン。ふたりはそれぞれの思惑を胸に、荒廃した街を歩きはじめる。最注目作家が放つ圧倒的スケールの歴史ミステリ。
4位		『熱帯』 森見登美彦（著）文藝春秋 第160回直木賞候補 沈黙読書会で見かけた『熱帯』は、なんとも奇妙な本だった！謎の解明に勤しむ「学団」に、神出鬼没の古本屋台「暴夜書房」、鍵を握る飴色のカードボックスと、「部屋の中の部屋」…。東京の片隅で始まった冒険は京都を駆け抜け、満州の夜を潜り、数多の語り手の魂を乗り継いで、いざ謎の源流へ―！
5位		『ある男』 平野啓一郎（著） 文藝春秋 彼女の夫は「大祐」ではなかった。夫であったはずの男は、まったく違う人物であった…。平成の終わりに世に問う、衝撃の長編小説。 彼女の夫は「大祐」ではなかった。夫であったはずの男は、まったく違う人物であった……。平成の終わりに世に問う、衝撃の長編小説。愛したはずの夫は、まったくの別人であった。
6位		『さざなみのよる』 木皿泉（著） 河出書房新社　　小国ナスミ、享年43。息をひきとった瞬間から、彼女の言葉と存在は、湖に落ちた雫の波紋のように、家族や友人、知人へと広っていく――。命のまばゆいきらめきを描く感動と祝福の物語！末期ガンに侵された彼女の章から物語は始まります。ナスミの周りの人々、ナスミと関わりのあった人々の彼女の死というさざなみに揺れる心が綴られています。

7位		『愛なき世界』 三浦しをん（著） 中央公論新社 恋のライバルは草でした（マジ）。洋食屋の見習い・藤丸陽太は、植物学研究者をめざす本村紗英に恋をした。しかし本村は、三度の飯よりシロイヌナズナ（葉っぱ）の研究が好き。見た目が殺し屋のような教授、イモに惚れ込む老教授、サボテンを巨大化させる後輩男子など、愛おしい変わり者たちに支えられ、地道な研究に情熱を燃やす日々…人生のすべてを植物に捧げる本村に、藤丸は恋の光合成を起こせるのか!?道端の草も人間も、必死に生きている。世界の隅っこが輝きだす傑作長篇。
8位		『ひとつむぎの手』 知念実希人（著） 新潮社 大学病院で過酷な勤務に耐えている平良祐介は、医局の最高権力者・赤石教授に、三人の研修医の指導を指示される。彼らを入局させれば、念願の心臓外科医への道が開けるが、失敗すれば…。さらに、赤石が論文データを捏造したと告発する怪文書が出回り、祐介は「犯人探し」を命じられる。個性的な研修医達の指導をし、告発の真相を探るなか、怪文書が巻き起こした騒動は、やがて予想もしなかった事態へと発展していく―。
9位		『火のないところに煙は』 芦沢央（著） 新潮社　　神楽坂を舞台に怪談を書きませんか」突然の依頼に、作家の「私」は、かつての凄惨な体験を振り返る。解けない謎、救えなかった友人、そこから逃げ出した自分。「私」は、事件を小説として発表することで情報を集めようとするが―。予測不可能な展開とどんでん返しの波状攻撃にあなたも必ず騙される。一気読み不可避、寝不足必至!!読み始めたら引き返せない、戦慄の暗黒ミステリ!
10位		『フーガはユーガ』 伊坂幸太郎（著） 実業之日本社 常盤優我は仙台市のファミレスで一人の男に語り出す。双子の弟・風我のこと、決して幸せでなかった子供時代のこと、そして、彼ら兄弟だけの特別な「アレ」のこと。僕たちは双子で、僕たちは不運で、だけど僕たちは、手強い。